

---

# 馬鹿とお嬢様

こより

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬鹿とお嬢様

### 【Zコード】

Z5897A

### 【作者名】

こより

### 【あらすじ】

主人公は日本出身の賞金稼ぎ。今回はターゲットの奪還が目標だつたが、ターゲットのガード及び依頼人から追われる事に。そして、お嬢には秘密が。主人公の車はランボルギーニ・ディアブロSVW  
はS&W・M3913TSW

「畜生！畜生！…畜生！」

俺は、ディアブロの屋根を叩きながら叫んだ。

腰に差してあるM3913には4発、予備の弾装はもう無い。助手席に座っている10歳のターゲットは涼しそうな顔をしてコーグを飲んでいる。

（何で、いつも俺はこうなんだ？）

俺はこの10歳のターゲットと共に依頼人、ターゲットの護衛両方に追われている。

「なあ、コーグを飲むのも良いけど、お前は一体……」

俺は問い合わせても無駄だと悟り、ディアブロの運転席に戻った。

今回は、ディアブロの性能に助けられたが、次に襲われたら、たつた4発の9mmパラベラムでこいつと俺を守らないといけない。

おまけに俺のディアブロは真っ赤なボディにSUVと入っている。

「こりゃ、弾薬の補充と車が必要だな。」

折角、3十万ドルも払って買った愛車を手放すのは惜しいが、死にたくは無い。

「ねえ、コーグが無くなつたわ、次はピザとダイエットコーグにして。」

「それにこの車狭い。次はもっと広いのにじでよ」

口を開けば相変わらず高飛車なお嬢様。

「わかつたよ、次のレストランで一服着けようや、な？それまで寝てろよ、もう22時だ。」

「嫌、まだ眠く無い。」

そう言いながら、ラジオのチューナーをいじついている。

相変わらずの兩だ。

MRのディアブロにはキツイが、相手も多少は似たような感じだろう。

そういう考えている内にショボいファーストフード店を見付けた。

「ここで良いかな？」

お嬢様に聞く。

「良いよ、お腹減ったから。」

中々可愛い所を見せる物だ、と思いながら、スイングウイングドアを跳ね上げる。

「ん？ 降りないのか？」

「ドア開けてよ、このドア重い。」

やれやれ、お嬢様は仕方ないか、と思いながら跳ね上げてやる。

「このミックスピザとダイエットコークね。」

「俺にもピザ分けてくれよ。」

店員を呼んで、ピザとダイエットコークを頼む。  
俺はその間、ラッキーストライクに火を着けた。

「ねえ。」

「うん？」

「煙草止めてよ、臭いんだから。」

「そいつは失礼。」

何で、何時も女の尻に敷かれてしまうんだ。

しばらくすると、ピザが来た。

「あなたの分ね。」

と言つて分けている。

どう見ても8切れ中1切れしか無い。

「全部食べられるの？ 太らない？」

と、「冗談を飛ばしたつもりだったが、まともに取られたらしく物凄い目で睨まれた。

「冗談だつて、まあ食えよ、俺の奢りだ」

言つてる間に食つている。

(まあ、しばらくは運命共同体だから良いか)

20分もしない内に7切れのピザを胃に収めていた。

「寝床の確保が必要だな、モーテルで良いよな？」

「この小汚いスポーツカーから出れるなら良いわよ。」

(おい、俺のディアブロが小汚い？休みの日は毎回洗車してるので？)

「じゃあ、決まりだな。」

「たゞ、怒っていたら、俺の身が持たない。」

「パパとママは心配して無いのかい？無断外泊は早過ぎると困りますが。」

「良いよ、あなたと私を殺そうとしてるのはパパの部下だから」「え？あ～、確かにガードは俺を殺す気満々のマッチョマンばかり

だつたけど、お前を殺すって？」

「違う、私を誘拐するようにあなたに依頼したのはパパ、ガードもパパの部下だけど。」

「いよいよ話がややこしくなってきたやがった、何故自分の娘を消す必要がある？保険金か？」

いや、それだけならわざわざ俺を使わなくとも、いくらでも方法はある、何より世界有数の大企業の社長だ、保険金なんて、3ヶ月分の給料にも満たないだろう。

では、何故殺す必要がある？

「なあ、パパは何でお前を殺そうとするんだい？」

「今は言えない、言ってもわからないだろうから」

悲しげに歌うようにして呟いた。

「わかった、今は聞かないよ、お前が喋りたくなつたら言つてくれ」  
そんな感じでハイウェイを80マイルで飛ばして、モーテルに入つた。

一番安い部屋を取り、シャワーを浴びる。

「ベットは一つしかないから、お前使えよ。」

「え？」

「え？じゃないだろ、女の子を優先するのは男として常識だ。」「そしたら、モジモジしながら言つてきた。

「一緒に寝てくれないの？」

「は？」

今度は俺が驚く番になつたようだ。

「だって、こんな知らない所で一人で寝るなんて怖いし・・・」

俺はつい吹き出してしまった。

「ハツハツハツハ、わかつた、隣で寝てやるよ。」

「な、何があかしいの！？」

ムキになつて言つてくる。

「いやー、可愛い所もあるもんだなーと思つてさ、まあ添い寝してやるから早くベットに入れよ。」

ブンブン怒つているが、ベットに入つてこむ。

「ねえ、早く来てよ」

俺はサイドボードにM4013とディアプロのキーを置いてベットに入り込んだ。

「おやすみ。」

「ああ、良い夢みてくれよ。」

明日はどこに逃げようとか考えている内にお嬢様は寝入つていた。  
(良い寝顔じやないか、事情はどうあれ、命に変えて守るか)

そつして俺も夢の中に落ちていった。

「う、うーん」

明け方なのに起きてしまった。

「眠くねえ、手入れでもするか・・・」

サイドボードに乗せてあるM3913を分解した。

30分は掛けてじっくりと磨いていく。

その後はディアプロの調子の確認と飯の調達だな。  
まあ飯はあいつが起きてからでも遅くは無い。

後ろのボンネットを開けて、6リッターV12エンジンを覗いた。  
(ちょくちょく見ないと駄目だよな)

快調なのを確認して部屋に戻った。

「よう、起きたか。」

「ん、おはよー」「ひつ」

「ちょっと煙草吸うから外に居るぞ、その間に着替えて・・・と言つても着替えなんか無いか。」

「良いよ、部屋で吸つても、その代わりまた『飯食べさせて』。」

何というか、下手な交渉人だな。

「飯なら何時でも食わせてやるから、な?」

「ありがとう。」

「じゃあ、とつとと出ようや。」

そうして、一人でティアブロに乗つた時

（ん？ あそこに止まってるメルセデスは何処かで？）

と思つた瞬間に俺はニコートラルから1速に繋いだ。

後2秒遅かつたら、一人で蜂の巣になつていただろう。

「なあ、あのマシンガンで撃つて来た連中は勿論、あれだよな。」

「そつ、だと思つ。」

狭いリアウインドウを覗いたら、やはりあのAMGチューンのEクラスだつた。

「躍起になつてるな、どうしようか？ 速いのは好き？」

答えを聞く前に、6速から5速に落とし、一気に加速した。

流石、5.5リッターV8エンジンにスーパー・チャージャーだ、10m後ろにぴつたり付いてくる。

「良い事考えたけど、乗る？」

「もう、ここまで来たら乗るよー。」

120マイルオーバーの攻防でお嬢様は顔が真っ青になつてゐる。

「じゃあ、一旦ハイウェイを降りるぜ。」

そうして、工場跡の一角にティアブロを停める。

「良いか、俺らには4発の銃弾しかない、わかるよな？」

互いに頷き。

「上手くやつてよ。」

俺のティアブロを見付けた出したEクラスがやつて來た。

( よ～し、もうちょい来い。 )

エンジン音を聞きながらじつと、フロントのトランクに入っている。

( いらっしゃる内にEクラスのエンジン音が消えた。 )

そうこうしている内にEクラスのエンジン音が消えた。

( よし、お嬢様、上手くやつてくれよ。 )

と、祈つていると当然の如く話声が聞こえてくる。

「あんた達、何しに来たの？」

「お嬢様、何を言つているんですか、お父様も心配しておられます  
よ」

( たく、映画の時間はそろそろ終わりにしないとな。 )

「おい！ ギヨエア！ ？」

やつてしまつた、何て馬鹿な男なんだ俺は・・・

「キヤハハハハハハ！」

「いてえ！！ マジでいてえ！！！」

「もう、何やつてんの！」

何故だ、何故攻撃されない、あんな馬鹿をやつたのに。

「いてて、まさかロックを外したと思ったら、しつかり掛つてやがつてた。」

頭を押さえながら、外に出る。

そこには、MP5とM92で武装していた男2人が倒れてい。

「何で、この人達寝てるの？」

「それは内緒！」

吐き捨てるようになつて、後ろを向いてしまつた。

2人の首筋を触つて、脈をみる。

「死んではいない、か。」

さて、このEクラスはどうしようか、貰うわけにも行かないし、壊すのも勿体無い。

「ま、こいつらも、帰るのに足は必要か。」

とりあえず、弾とMP5は貰つて行くとするか。

(あ、こいつらウイーンじゃん。フホテラルじゃねえなりこりうね。)

「どうぞ、お嬢様。」

そう言つて、ドアを跳ね上げる。

「だんだん、わかつってきたじゃないの。」

「そりや、48時間も一緒にいりやな。」

そう言つて、イグニッションキーを捻る。

「とりあえず、銃は当面入手しなくて良いな。この四立つ車を変えるか。」

「その前に、ご飯食べたいよ。」

「そうだな、飯・・・ん?」

リアウインドウを見ると、物凄い速さでコルベット2台が追いかけてくる。

(不味い、やつは最新のNO6じゃねえか、ディアブロでも難しいな。)

「また、飛ばすからな、飯はその後だ。」

「ええ!?

4速から5速に上げ、水温を見る。

流石ランボルギーニだ、高回転は安定しているな。

コルベットはスピードを落とさずに、真後ろに着いた。

そして、真横に寄せてきて、窓を開け出した。

「ヤバいぞ、伏せるんだ!!」

バリバリバリバリ!!

耳をつんざくような激しい撃発音。

(糞野郎が、アサルトライフルかよ)

ギリギリで避けたが、次は穴開きチーズより酷いだろう。

「仕方ねえ、ちょっと反撃してやるか。」

ディアブロの狭い窓から手を出して、MP5を撃つ。

(まるでファントムだな)

流石に9mm程度じゃ、頑強なゴルベットのボンネットは破れない  
よつだ、と思つたら。

ドギヤシャーン！

1台田のゴルベットはいとも簡単に隣を巡航していたトーラスヒド  
ウビルを巻き込んで、ポップコーンになつた。

(ありや、簡単に終わつたな、ショボいドライバー使うからだ)

「なあ、生きてるか？」

と、助手席を見たら、お嬢様は祈るよつにしてこる。  
(やつぱりあれは怖いよな)

2台田のゴルベットはやる気が失せたのか、マシントラブルで一気に  
に失速している。

「ハツハ、お嬢、やつたな、確認殺害戦果1だ。」

「あ、うん、何かとてもお腹減った。」

儂く笑いながら言つた。

何故だろ？この哀しい運命共同体の少女がとても愛しくなつて、  
頭をワシシャワシシャと撫で回した。

「んん。」

目をつむつたまま、大人しく撫でられている。

「よし、何を食いたい？ピザか？フライドチキンか？」

「日本食食べてみたい。あなた日本人でしょ？」

「良い田を持つてるじゃないか、そう、俺は国籍こそ違うが日本出  
身だ。」

「じゃあ、美味しい日本食知つてる？」

「うーん、基本的にファーストフード世代だったからなー、やっぱ  
り、定番の寿司にするか。」

「お寿司は食べた事無いから、行つてみたい。」

「じゃあ、行こうか、この辺はたまに走りに来るから、結構わかる  
ぜ。」

「わがまま、言つてごめん。」

本当に申し訳無さそうに言つ。

「気にするなつて、娘が出来たと思えば良い物を。」

「ありがとう。」

また頭をワシャワシャと撫でながら。

「礼は言いつこ無しだぜ。」

そう言つて、一直線に伸びるハイウェイから降りる。

飯を食つて、一服着ける。

「煙草は控えた方が良いよ、それと髭剃つたら?」

「つるさいぞ、髭はモーテルに着いたら剃るさ。」

「髭剃つた方が絶対格好良いつて。」

と、笑いながら言つてくる。

俺はムスつとしたまま、ステアリングを握つている。

4マイル程走つた所でガスを補充して、モーテルに泊まつた。  
シャワーを浴びつつ、髭を剃つてゐる、お嬢は先にシャワーを済ませていた。

「あ、男前になつた。」

「なあ、明日はパパに会いに行こうと思つんだけど。」

そしたら、急に凄く怯えた表情で。

「嫌、絶対に嫌!!」叫ぶように言つた。

「嫌がるのもわかる、けどな、お前を守る以上、何で親父に殺される必要があるのか気になるだろ?」

優しく、諭すように言つ。

「でも、行つたら、あなたも私も殺される。」

「大丈夫さ、俺もお前も殺させはしないさ、な? 2回も襲われたけど、2人で助けあつたじやないか。」

「それは・・・」

「確かに、一回目に襲われた時に、俺はモロにドジつた、でも、相手は倒れていたな、そこは聞かないでおく。」

「確かに、一回目に襲われた時に、俺はモロにドジつた、でも、相手は倒れていたな、そこは聞かないでおく。」

黙りこくれてしまった。

「まあ、じうこうつ事は明日考えよう。今日まもつ寝よう、疲れた。

「うん、私も疲れた、もし良かつたら、また昨日みたいにして。」

「ああ、わかった。」

「一人でシングルのベットに入り込む。

「手を繋いでも良い?」

「良いぜ、お嬢が安心出来るなら。」

小さくて暖かい手が包んでくる。

「じゃ、また明日。」

「ああ、良い夢見てくれよ。」

お嬢が寝たのを確認してから。

「もしもし、俺だよ、ディアブロと交換出来る車はあるかな?」

「パワーがあつて、AWDのセダンが欲しい。アウディのS6かク

ワトロポルテ辺りを頼む、ああ、わかった、明日取りに行く。」

「ちょっとした訳有りでな、うん、いつも済まない。」

携帯を切り、お嬢の手を再び握る。

幸せそうな顔をして寝ている。

(あそこの親父なら最低でもA4かE3504マティックは用意してくれるだろう、それにしても今日は疲れた、早く寝よう。)

そうして、俺は夢の中に落ちて行つた。

## 1（後書き）

登場人物に基本的な名前はありませんが、今後の状況では加筆します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5897a/>

---

馬鹿とお嬢様

2010年10月12日04時38分発行